

## まえがき

昨年（1989年）の初め、本書の姉妹編である『中国の世界認識と開発戦略・関係資料集』の刊行を準備していたとき、資料集所収の論説が新鮮な響きを与えるものとわれわれは信じており、中国の世界認識の変化と開発戦略の模索も歩を速めるものと予想していた。ところが例の北京における流血事件以後、中国の改革論議は沈滞をよぎなくされた。一方、東欧、ソ連の政治改革は何人も予測できなかった急展開を遂げ、改革をめぐる知的状況が大きく変わってしまった。1、2年前の中国の論議でさえいささか色あせて見えることは否み難い。

本書は先の関係資料集に続くいわば関係論文集である。予測できなかった事態の急変によって、われわれの仕事もいくぶんかの影響を免れえなかったが、次の二つの理由で、本書刊行の意味は失われていないと判断する。第1に、中国の改革論議が再び活発化するとき、事件前夜の地点から再出発することになるであろうということである。われわれの資料集と論文集のよって立つ基盤でもある。第2に、ソ連、東欧の変革の課題と中国の変革の課題は、共通する面もあるけれども、違いも大きいということである。われわれの基本視点は、社会主義の体制比較ではなく、南北問題である。“南”の社会主義国である中国が世界をどう認識し、どのような開発の課題を抱えているのか、これが中心課題である。資本主義見直し論においてさえも、“南”の国である中国の立場が反映されている。

本書は大きく分けて二つの部分からなる。中国の世界認識とその変化について論じた3篇の論文と、中国の開発戦略の課題と政策展開について論じた3篇の論文、この二つの部分である。大きく異なる二つの対象領域を統一テーマを掲げて考察することの是非、あるいは狙いが成功したか否かについては、

読者の判断に委ねるほかない。

「南北問題と中国」に焦点を合わせた実質2年にわたる研究会（昭和63，64年度）に協力して下さった研究会メンバーの皆さんに深く感謝する次第である。

1990年8月

小林 弘二